

「もし ぼくが バナナだったら」

もし ぼくが バナナだったら、あの バナナがいい。

黄色^{きいろ}く 太^{ふと}っていて、なかみが たくさんつまったやつ。

もし ぼくが 山^{やま}だったら、

雪^{ゆき}をかぶって 雲^{くも}の中^{なか}に そびえる、あの 山^{やま}がいい。

ゴオオオと 地^じ鳴^なりを ひびかせるけれど、

ぜったいに ドドーンと ふんかは しない 火^か山^{ざん}なんだ。

(いや、やっぱり あぶなくなければ ふんかも してもいいよね。)

もし ぼくが 鳥^{とり}になるなら、

でっかい つばさに ながーい 首^{くび}の

おお 大きな 鳥^{とり}になりたい。

空^{そら}のかなた、ひとり どこかへ とんでいく

どうどうとした ぼくのすがたは、

いつも 遠^{とお}くからしか 見^みられないのさ。

もし ぼくが

牛^{うし}だったら、

あそこに

立^たっている

あの
牛がいい。

あの 牛を 見ていると、

みどりの くさっぱらに 立つ、黒^{くろ}い 牛で いることが

せかいで 一^{いちばん}番 だいじなことに 思^{おも}えてくるんだ。

もし ぼくが 雲だったら、

大きな 真^まっ黒い あらし雲^{ぐも}になって、

ピカピカ ドカーン と かみなりを おとして
バラバラ と ひょうを ふらせてみたい。

でも、やっぱり、もっともっと 小^{ちい}さくて、

かるくて ふわふわな 雲のほうが

いいかんじ、かもね。

もし ぼくが てんとうむしだったら、

少^{すこ}し ふくざつな

きもちだろう。

あそこまで

小さくなるのは

ちょっと こわいかも。

でもね、ひよっとしたら
ぼくは とっても
ゆうかな

真っ赤^かな てんとうむしで、
なあんの しんぱいも なしに
空^{たか}高く とんでいるかもしれない。

もし ぼくが 魚^{さかな}だったら、
それは ちょっと いやだな。
魚には なりたくない。

ちょっとの あいだ、くじらに なるんだったら まだ いいかな。
でも、できれば 魚には なりたくない。

もし ぼくが ぞうだったら、
どこを 歩^{ある}くか
とっても ちゅういしなきや
いけないと 思う。

まあ、しばらくしたら なれるよね。

ぞうになって、アフリカで 力^{ちからづよ}強く
自由^{じゆう}に 生^いきていけたら いいだろうな。

もし ぼくが スプーンだったら、
あの スプーン——

そう、かんぺきな ^{かたち}形で、

つかいふるされて いいぐあいに 色が くすんだ、
あの ぎんの スプーンがいい。

そんなのは へんだと
思うかもしれないけど、
ぼくは スプーンになるのも
けっこう いいと思う。

もし ぼくが ^{ほし}星だったら、あの 星がいい。

ほら、ふたつ ならんだ ^{うえ}上の ほうの、あの 小さいの。
いつも ぼくに ほほえんでくれて、
ほかの 星たちとは ぜんぜん ちがうんだ。

もし ぼくが ^き木だったら、
とつても しあわせだろう。
どんなに ^{とし}年をとったとしても、

^{なに}何に なってみたいかな、と ^{かんが}考えたら、
木になるのが さいこうだな、と いつだって 思うだろうなあ。

もし ぼくが ねこだったら、^{からだ}体は ^{しろ}真っ白で、

いつも よそよそしくて、めったに ^なのどを 鳴らさないんだ。

でも、きみだけには とくべつに ゴロゴロと ^{おと}すごい音を ^だ出すよ。

そんなに さわいで どうしたんだろう、と みんなが 見に来^きちゃうほど
にね。

もし ぼくが ライオンだったら、あそこにいる ライオンがいい。
ふかい 考えごとを しながら、友^{とも}だちと すわっているのさ。

もし ぼくが ライオンだったら、
きみは ぼくと 話^{はな}したくないかもしれない。
だから、ぼくは ライオンには ならない。

もし ぼくが 小さな 男^{おとこ}の子^こだったら、
それか、今^{いま}の ぼくみたいな、大きな 男の子だったら、
——まあ、そんなに 大きくは ないけど、そんなに 小さくもないからね——

とにかく、どんな 男の子に なれたとしても、
やっぱり 一番 心^{こころ}地^ちがいいのは、
ぼくの ままで いることさ。